



「支え愛」の精神のもとで活動する人たちを「支える」
日本財団の福祉車両配備事業。累計3万3,313台に

福岡の天神ソラリアプラザでの贈呈式

福祉車両配備事業を通して日産LV(ライフケアビークル)のご愛顧に感謝いたします。

2014年2月27日(木)、中日新聞本社(名古屋市中区)において、2013年度日本財団福祉車両贈呈式が行われました。当日はあいにくの雨。式は社屋講堂で開かれ、多くの贈呈式関係者が出席されました。

日本財団の笹川陽平会長が挨拶に立ち、「全国で3万台以上の日本財団が配備した福祉車両が走っています。これだけの数が1つの目的で使われる。ひとえに皆様の実績の積み重ねによるものであり、その大事なお仕事をお手伝いできることに誇りを持っており」と、日本財団の福祉車両配備事業における姿勢を語りました。続けて、「皆様は高い志を持ってクルマとともに仕事をしつらっしゃる。クルマを大切に使用していただいている、そのおかげで国内で役目を終えたクルマが遠くペルーやカンボジア、ミャンマーで第二の勤めができる」と語り、丁寧な使い方に感謝の意を伝えました。そして最後に、「民間の人々が民間の人々を支えるという

「支え愛」のコミュニティ作りが求められています。そういう視点からも社会福祉で活躍する皆様のご活躍を期待するとともに、さらにお役に立ちたいと思っております」と締めくくりました。

次いで、贈呈された74団体を代表して(福)蒲郡市社会福祉協議会、(福)和進奉仕会、(特非)ふれ愛名古屋、(福)あゆみの会、(福)ほとはむの5団体に、「レプリカカー」が笹川会長から授与されました。

団体を代表して蒲郡市社協会長の金原久雄氏が、「今年から、イタリアの『ベネトン社』の無償協力でシンボルマークが一新され、明るい笑顔になりました。福祉車両の存在意義がますますアピールできると思います。クルマを使って、明るく元気な福祉の町を作っていきたいと思っております」と、福祉車両配備事業の明るい展望を述べました。

また、中日新聞社会事業団の深見豪事務局長は、「昭和12年から新聞社にしかできない福祉

を目指して活動してきました。地元への貢献、社会の認知度を高めるという点からも、今回のような贈呈式の場所提供など、日本財団の福祉車両配備事業に協力して、福祉活動に取り組んでまいります」と、意気込みを語りました。

NV350キャラバンチェアキャブの贈呈を受けた、ふれ愛名古屋の鈴木由夫理事長は車いすが4台乗るD仕様に、雨の中、笑顔で喜びを表現していました。愛知県では今回の104台が加わり、1994年度のスタート以来で累計1,421台の福祉車両が贈呈されています。

贈呈式終了後、1階ロビーでは、移動販売車の贈呈を受けた共同作業所ほとはむの利用者さんたちが、自作のパンやクッキーを袋詰めにして、贈呈式に出席した方々に配られました。雨天でなければ、玄関前に停められた移動販売車で手渡しするところでしたが、渡す人と受け取る人の笑顔の交歓は、「雨にもマケズ」の気持ちを伝え合っているように感じました。



福祉車両配備事業における姿勢を語る笹川会長



特定非営利活動法人 ほとはむのみなさん



中日新聞社会事業団事務局長の深見さん

贈呈式参加団体の声



ふれ愛名古屋理事長の鈴木由夫さん(左)



特定非営利法人 ふれ愛名古屋 [愛知県名古屋市]

重度の身体障がいと知的障がいとを併せ持つ重症心身障がい児だけを対象とした珍しい施設です。放課後等デイサービス(就学児)と児童発達支援事業(未就学児等)の認可を受けた4施設に1歳から19歳まで約50名が通所しています。NV350キャラバンチェアキャブの助成を受けて、理事長の鈴木由夫氏は、「全員がベッドと車いすで過ごしているので、放課後や休日のデイサービスを充実させるために送迎車として使います。子どもたちの外出の機会をもっと増やしたい。NV350キャラバンチェアキャブは4台の車いすが乗れて、理想的なクルマです」と、お喜びいただきました。



日本財団公益・ボランティア支援グループ
グループ長 車両チームリーダー

吉田哲朗 氏

一昔前は、福祉施設というと人里離れた場所にあるイメージでしたが、今は街中にできるようになり、デイサービスを利用する環境が整ってきました。自宅と福祉施設の送迎にクルマは必需品。日本財団の福祉車両配備事業がスタートした1994年に比べると、需要も多し、車いすの固定装置やステップなど福祉車両の性能も大幅にアップしています。メーカーの改良意欲、その技術力には感心するばかりです。

出かける喜びを、一人でも多くの方へ

